

穂高神社の御船祭と隠された若宮の御祭神

刈間 健志

現在、穂高神社は本殿主祭神として穂高見命を、左右両殿に綿津見命と瓊瓊杵尊を配祀している。また若宮社に安曇比羅夫命を、相殿に信濃中将(ものぐさたろう)を配祀して、御船祭の由来をこの若宮社に帰せしめている。

若宮裏には平成4年、軍船上に直立する阿曇比羅夫像が建立された。傍らの石碑文には以下のような文言が記されている。

「大將軍大錦中阿曇連比羅夫は、天智元年(662年)天智天皇の命を受け、船師170艘を率いて百済の王子豊璋を百済に護送・救援し王位に即かず。天智2年新羅・唐の連合軍と戦うも白村江(朝鮮半島の錦江)で破れ8月甲戌27日戦死する。9月27日の例祭(御船祭)の起因であり、阿曇氏の英雄として若宮社に祀られ、英知の神と称えられている。伝統芸能である穂高人形飾物は阿曇比羅夫と一族の雄姿を形どったものに始まると伝えられている。」「明治初期までは8月27日例祭、新暦となり9月27日となる」

Wikipedia 「阿曇比羅夫」の項にも「663年8月27日-28日の白村江の戦いで戦死したとされる。穂高神社の御船祭は毎年9月27日に行われるが、これは阿曇比羅夫の命日であるとされる。」とあることから、平成4年以降に著された記事の多くがこの石碑の一文を参考としているようである。碑文を刻むにあたり、神社内でどのような話し合いが持たれたのか知る由もないが、初めて御船祭を見物する者でも過不足なくその由来を理解できるよう配慮した様子が窺われる。それは次の二点がはっきりと記されているからである。

- a)阿曇比羅夫將軍が白村江の戦で戦死した。その命日8月27日が御船祭の由来である。
- b)明治初期まで御船祭は8月27日に行われたが、新暦になって9月27日に移された。

しかし、この二点には大なる疑いがある。

先ず a)について、日本書紀では阿曇比羅夫將軍の戦死を描いていない。阿曇比羅夫將軍が王子豊璋を王に即かせるため船団を率いて百済へ渡った様子は確かに日本書紀に記されているが、その後阿曇比羅夫將軍が新羅・唐連合軍と前線で戦い戦死した記述は、どこをどう読んでも見つけることができない。船団を率いて百済に渡って以降、阿曇比羅夫將軍の消息は杳として知れないのだ。

日本書紀以外にも「白村江の戦」を描いた文書が存在しているのではないかと数年前、神社側に直接尋ねて回答を得た。「ひとりの神社職員の方が日本書紀を斟酌して阿曇比羅夫將軍の戦死という事実を見出した」との由。やはり日本書紀以外に手がかりはなかったのである。

そして b)について、神社の古文書は明治初期まで御船祭の催行日を7月27日としている。宮地直一博士も「穂高神社史」の中で同様の日取りを記していることから、神社側は何故か意図的にこれを誤ったということになる。

以上の二点から引き出される結論は、ひとつしかない。阿曇比羅夫將軍の命日を御船祭の催行日に合致させるため無理を強いて伝説を捏造したということである。神社側にも事情があるにちがいない。これ以上の詮索はやめておこう。しかし、平成になって流布された御船祭の由来については、明らかなフィクションであるということだけは指摘せねばならない。

<御船祭と御祭神>

平成4年、若宮裏に阿曇比羅夫像が建立される以前は、「陸上がりをした安曇海人族が、上古栄光とともにあった海の記憶を留めるため、風習として伝えてきたのが御船祭である。」そのような声がしばしば聞かれた。

昭和62年刊「海人族のウジを探り東漸を追う」の中で黛弘道氏も御船祭について「海の祭儀が姿を変えながらも連綿と伝えられてきたのであろう」との雑感を述べている。本殿の主祭神、穂高見命は綿津見命の後裔であり、さらに安曇氏は穂高見命の後裔であるから、御船と主祭神の関係より鑑みて素直な感想を述べられたのであろう。

ところが、江戸時代も中頃まで主祭神は穂高見命ではなかった。
元禄11年、穂高組邑々寺社御改帳によると

大明神(本殿) 天津彦火火瓊瓊杵命
左殿 天児屋根命 天太玉命
右殿 天王屋命 天鈿女命 石凝姥命

これらの祭神の配置は天孫降臨に因んだもので、京都吉田家の影響下にあったものと考えられる。この頃の御船祭の様子は明確ではないが、御船は担ぎ船であったようで、割と質素に行われていたようである。

「穂高神社史」(昭和24年刊)の中で宮地直一博士は御船や御船行事について次のように述べている。

「その船と称するは会々恰好の類似するため、航行に因む由来に基づくのではない。御船行事は単なる神賑の目的を以ってせらるるのではなく、もともと祭祀に先立ち神霊を向かえ奉った遺風であり、・・・(中略)・・・かくして前夜に神迎えを畢えて、翌朝に奉仕するのが当日の本祭で、御船行事はもと之が豫儀であったのを、後に移して本儀の中心に据えたのである。」

宮地博士においては、もはや神輿が船形であることに特別な意味はなく豫儀であった行事がいつしか華やかさを増して本儀の中心になったとしている。その一方で、御船行事の源流を「諏訪の風儀を本様とする派生的現象」と見て、諏訪大社柴船行事からの影響に言及している。

この頃の主祭神と祭との対応関係を見る限り、船形に特別な意味合いを見出すことはできない。元禄時代すでになくなっていくが、かつては境内に諏訪社(南宮)があつて、「本宮・若宮・南宮」三宝殿の存在により穂高神社は「三宮」を別称した。宮地博士は御船行事の源流を廃宮となっている南宮の遺風と見たのである。

幕末に近づくに連れ、御船祭は華美の色を増して現在に至るが、その契機になったかも知れぬ記述が「善光寺道名所図会」(天保14年)の中に見出せる。

主祭神 穂高見命
南殿 石婆女命
北殿 瓊瓊杵命

「例祭七月廿七日、祭礼ノ節ハ氏子ヨリ船ノ形ヲ作りテ色々ノ美服ヲ以テ是ヲ飾ル、コレ往古此辺湖ナリシ時ノ余波トイイ伝フ」

穂高見命が主祭神として漸く姿を現し、また巷間流行していた安曇湖(仮名)の伝承を巧みに取り込んで大いに庶民の支持を集めたことが窺える。今も神社敷地内に、犀龍小太郎の像が置かれているが、安曇湖(仮名)上を船が行き交う様を御船祭に重ねて、これを祭りの中心に据えようとした意図が窺える。祭りの原義は遠ざかり、その中心は神から人へ、神への奉仕から練り物(享楽)へと移りはじめている。

<流行と信仰>

現在、穂高神社若宮相殿には信濃中将(ものぐさたろう)が祀られている。相殿というのは実際には存在しない社殿で、安曇比羅夫命とともに若宮社に合祀されているという意味である。安曇比羅夫命が若宮社の祭神として登場するのは幕末から明治初期にかけてなのに対し、「ものぐさたろう」が若宮社あるいは末社に現れるのは意外に古く、戦国時代の天正年間にはその片鱗が見えている。当時「若宮御宝殿」の奉仕を行ったのは犬甘島(現松本市島内)の犬甘氏であったから、「ものぐさたろう」は小笠原家の家老犬甘氏の氏神として穂高神社に祀られることになった、と一志茂樹博士は主張している。その後、物臭太郎本地譚は関西地方において御伽草子として流行し、「おたがの大明神」(「おたが」は「お多賀」とも「穂高」とも解釈されている)として(物語上も、現実としても)里帰りすることになるのである。

江戸時代になってさらに信仰化が進み、信濃国司「信濃中将(ものぐさたろう)」は穂高神社の造営者としてその名を刻したことが信府統記(享保九年)に見える。

信府統記「穂高大明神(現穂高神社)」の項に記される由緒書の内容を要約すると、

- ① 皇御孫(ニニギノ尊)が穂高嶽に降臨した
- ② 文徳天皇の御宇、信濃中将が穂高神社を造営した
- ③ 桓武天皇の御宇、田村利仁が義死鬼という東夷を退治した

大きく分けると以上三点に要約される。①②は現在も本宮・若宮の御祭神として崇敬を受けている。ところが③に関してのみ、明治以降の穂高神社御祭神、縁起、由緒においてさえ全くその影も見受けられない。

宮地博士は次のように言う。「享保九年にできた信府統記に至って延暦年中田村利仁の義死鬼退治の一齣を加え、これまでにない武事的色彩を交えたが、田村將軍の異賊退治に関する物語は寺社の縁起に織り込まれて信州の一円に広がり、大に人気に投じていたので、本社もまた大勢に推されたのであろう」

流行が去ってしまったせいなのか、明治期を迎える頃には義死鬼退治の話は社伝から完全に消滅してしまう。しかし、今でも筑摩神社は八鬼の首塚を祀り、放光寺・満願寺では八鬼の怨霊を調伏し、犀の宮神社は境内社に八面大王を祀っている。魏死鬼の磐屋を守り、有明山神社を産土とする鼠穴地区は現在も御船祭の主人的役割を務めているが、実のところ御船祭は八面大王伝説を多分に、そして多面的に取り込んで発展してきたのではないかと思われる点が散見される。ともすると若宮社の御祭神安曇比羅夫命に仮託された真の御祭神こそ、口にすることさえ憚られた八面大王その人なのかもしれない。

社地に祀られたほとんどの祭神が現在まで引き継がれているのに、跡形さえ残していない八面大王魏死鬼。忌まわしいその呼び名ごと消し去られてしまったかのようなキナ臭さを感じさせる。

<おふりょう行事>

古文書によれば、旧暦の七月二十六日、二十七日に行われていた例大祭は明治維新太陽暦の導入により九月二十六日、二十七日となり今日に及んでいる。

宵祭、本祭において祭参加者は各地区の旗を持って整列し、神楽殿を周回する。これを「お布令(ふりょう)渡し」という。宵祭においては等々力区が、本祭においては鼠穴地区(松川村)が先頭に立ち、昔から「鼠穴の茅野氏のお布令旗が来なければ御布令が渡らない」などと言われ、今でも松本城主小笠原氏の定紋「三階菱」入りの布令旗を持った鼠穴の茅野さんが列の先頭に立っている。

お布令参加地域には、「鼠穴」の他「耳塚」「立足」「狐島」「押野」「古厩」など

八面大王に関わる地域も見られるが、殊に耳塚地区は古くから祭りで使われる榊(そよご)を寄進してきたことで知られている。

宮地博士は言う。「祭礼における榊の献進は、ほかにも例のあることであるが、その意味は神事に必須の用木として、一社にとり最も有縁の所より奉納せられるものである。(中略) 従って耳塚の地に浅からぬ由縁があったことが考えられる。」

そして最も重要なのが首塚を祀る筑摩神社であるが、現在旧安曇郡内の地域が参加して行われる御船祭に旧筑摩郡地域からの参加者はいない。

ところで、鼠穴の茅野氏が「三階菱」の旗を持って参加するのは、穂高神社がかつては小笠原氏の庇護を受け、配下の武将細萱氏が神社の大旦那として造営を手がけていた名残であるが、その当時「若宮御宝殿」への奉仕を犬甘島の犬甘氏が行っていたことは前述したとおりである。犬甘氏は小笠原家の侍大将や家老を務める家柄であったから、その居城林城にも近く、小笠原氏の厚い崇敬を受けた筑摩神社を、犬甘氏も奉ずるところとなっていたに違いない。江戸初期に催行された御船祭には当然犬甘氏も参加していたはずで、その役どころは筑摩神社を代表して、お布令に参加することではなかったろうか。八面大王に関わる地域がそれぞれ御船祭におけるきわめて重要な役割を担っていたのである。

<若宮とは>

中世以前、穂高神社本宮にどのような御祭神が祀られ、どのような祭りが行われていたのか。戦で記録が焼失したため、残念ながらそれを辿ることはできない。若宮社に至っては、明治時代初期に安曇比羅夫命が現れるまで「大明神」とだけ記され、具体的な神名は明らかではなかった。

そもそも若宮社とはいかなる神を斎祀る社殿なのであろうか?

「若宮社」とは・・・

広辞苑によると

- ① 本宮の祭神の子供をその境内に祀った神社
- ② 本宮を他の地に新たに勧請して祀った神社

日本大百科全書によると

若宮神社ともいう。基本的には本宮の摂社・末社として主祭神の御子を神に祀る社をいうが、時に本宮に対してその主神の分霊を勧請した社を若宮といい、また非業の死を遂げた怨霊を慰め鎮めるために祀った社を若宮と称する例も少なくない。

主祭神の御子を神に祀った例としては、若宮八幡の仁徳天皇、春日若宮の天押雲根命、大神神社若宮の太田田根子、梅宮神社若宮の橘諸兄などの例がある。本宮に綿津見命、若宮に穂高見命であれば定義どおりの組み合わせだが、実際はそうっていない。

倉田兼雄著「信濃有明山史」には「八面大王の幼い子供や婦女等は島(松本市島内)へ流され、その後犬養の姓にて勢力を得た」旨の伝承が記されている。あくまで伝承だが、本宮に八面大王、若宮に物臭太郎(大王の子供)ならびったりの組み合わせといえる。

仁科濫觴記には「鼠賊等は島に引き連れ行き、戒め縄をときて追放したり」と見え、「隠れたる鼠等の輩をご赦免有りて八鬼山原を給わり・・・」許されて土地を与えられた様子も見られることから、信濃有明山史の伝承は仁科濫觴記の内容を織り込んで発展したものであるようだ。「島」というのは犬甘氏の本貫であり、島内と新村の境、樽木川の氾濫原には「ものぐさたろう」の伝承地がある。何とも興味深く思わせぶりの伝承である。

一方、「非業の死を遂げた怨霊を慰め鎮めるために祀った社を若宮と称する」例として、後鳥羽院・順徳院の怨霊を鎮魂するため鶴岡八幡宮内に築かれた若宮社や、井上皇

后が幽閉後産んだとされる「雷神」の怨霊鎮魂のためつくられた霊安寺若宮や火雷神社若宮。菅原道真など八所御霊を祀る下御霊神社若宮(和光明神菅原和子を配祀)。藩主に謀殺された島津忠兼の祟り鎮めのため造営された、鹿児島出水の若宮神社など枚挙に暇がない。

祟り神を慰撫し、鎮魂することによって強力な守護神に転生させる信仰を御霊信仰という。北野天満宮創建までの経緯は御霊信仰の最も典型的な例であろう。

滅ぼされ、身体を切り刻まれ、離れた複数の場所に埋葬された八面大王の怨霊は、格別の方法をもって鎮められねばならない悪霊である。そのため若宮を設け、鎮魂を行ったと考えて矛盾はなかろう。

<御祭神の名は?>

悪鬼、悪霊と化した八面大王がそのままの名称で御祭神となることはありえまい。何か別の祭神名で祀られたはずである。

埼玉県に鬼を祀る鬼鎮神社があるが、衡立船戸神と八衢神、二柱が祀られている。船戸神は岐神、久那土神、クナド神、クナト神とも言われ賽の神や道祖神の原型とも考えられている。「日本書紀」のサルタヒコ、「古事記」の八衢神と同神である。

天孫族にとって鬼とは本来、在来の日本人や弥生系先住民を指す言葉であったろう。その後天皇の体制に反逆する者を一般に鬼と言うようになった。だから鬼の系譜に属する神は土俗神や地祇に属する神ということになる。その他、外来の神も可能性もある。

ところで「ものぐさたろう」が戦国時代の天正年間、穂高神社に持ち込まれていたことを前述したが、天正七年の西大祝文書に記される敷地社のリストには「少彦根社 俗にはものぐさ太郎と云ふ」の注記があって、「ものぐさたろう」が実は少彦根(名)命として持ち込まれていたことがわかっている。少彦名命は常世からやって来てオオクニヌシの国づくりに協力するパートナーで、薬や甘酒の神として知られている。ものぐさたろうは出世して国司信濃中将となり、百二十歳まで長生きをする。健康長寿の「ものぐさたろう」と薬や甘酒、常世の神である少彦名命。まさにピッタリのイメージではなかろうか。信濃中将はその後少彦根命と切り離されて若宮に祀られることとなる。

同様にして八面大王もまた、境内に祀られるいづれかの神に仮託され密かに祀られたとは考えられないだろうか。天正年間、境内社に祀られた土俗神・地祇・外来神にあたる摂社は、牛頭天王・子安大明神・保食神・少彦根命の四柱である。牛頭天王を除く三神は江戸時代から明治、平成の世まで永く穂高神社の境内社として祀られている。保食神と子安大明神は女性神、少彦根命はものぐさ太郎の化身である。そして牛頭天王は疫病神として名高いが、当初(平安時代)は御霊を鎮めるために祀られた歴史がある。祇園御霊会は祟り神である牛頭天王を鎮魂して守護神へと導くための祭りである。そうしてみれば八面大王が身をやつす神としてこれ以上ふさわしい存在はないだろう。牛頭天王は幕末まで境内社に祀られた後、明治の神仏分離令によって祇園社が八坂神社と名を変えるのに伴い退いている。そのころ突如として若宮に現れるのが阿曇比羅夫命なのである。

「ものぐさたろう」が後に境内社を離れ若宮の祭神となったように、八面大王もまた若宮の祭神となったのかもしれない。当然、八面大王魏死鬼などというオドロオドロしい名前で祀られることはない。

非業の死を遂げたと伝えられる八面大王と若宮の御祭神「阿曇比羅夫命」。二人の横顔が今ゆっくりと重なっていく。

[追記] (この論考を書き終えてから新たな発見があったので追記する)

幕末の穂高神社で今も御祭神として祀られている穂高見命や綿津見命の回復に尽力した人物がいる。高島章貞である。

章貞は1858年、52歳で書いた評論集『寒郷炉譚』「穂高神社考」の中で天孫降臨に関わる神々が御祭神に据えられていることを批判し、記紀時代の御祭神が復帰することを強く主張した。

家族同然の付き合いにあった東大祝・穂高但馬や親友の西大祝・穂高数馬(政文)に共鳴し、また彼らを巻き込みながら安曇の神、綿津見神の復興運動を繰り広げた。

これが奏功したのか、明治初期には主祭神として穂高見命が、副神として綿津見命がみごとに蘇っている。

その一方で章貞は、記紀時代の人物として阿曇比羅夫の存在、彼の業績を高く顕揚している。穂高嶽に降臨した穂高見命は神河内(上高地)で子孫繁栄し、漸う安曇平に遷居したと語っているが、その時代がまさに阿曇比羅夫の大活躍した時代であったというのだ。

新たな穂高神道ともいえる高島章貞のこの考えは大正12年版の南安曇郡誌にも受け継がれていることから、神社の社職や郡行政にも大きな影響を与えたと思われる。

章貞はさらに重大な発言を記している。

「今の神社の境内に末社として七社あるうち、勝れて高きを若宮大明神と称ふ。其神躰は、例の社家にて名を伝に知らざるが、恐らくは、大將軍比羅夫の廟にて、連れる末社は正史にしるき連、宿禰たちならずや、比羅夫將軍は舟師をひきいて海外を征討し、威徳高かりしかば、殊にまつりたりけん」

「按この七月廿七日は比羅夫の失にし日か、将何事かありし日なるか・・・云々」

①若宮大明神は大將軍阿曇比羅夫の廟である

②阿曇比羅夫將軍は海外(白村江の戦か?)を征討し、威徳が高まった故特に若宮に祀られた

③七月二十七日は阿曇比羅夫將軍の命日か何かではないか

①②③から想定される帰結は何であろうか?

穂高神社社職によって今も章貞の提唱する新穂高神学が継承されているとするなら、彼の建てたテーゼをさらに発展的に継承したいと欲求する人物が現れても不思議ではない。

冒頭で述べた阿曇比羅夫將軍像の石碑文について宮司さんから質問の回答を戴いた折、「昔からの言い伝えのようなものがあって、社職の方が日本書紀を斟酌され碑文の内容を見出されたのです」と仰られたのを急に思い起こした。宮司さんの仰る「言い伝え」とはまさにこのことだったのであろう。

もしこの想像が当たっているとすれば、私の推理を一部修正しなければならない。すなわち「牛頭天王とともに境内社から退いた八面大王は、阿曇比羅夫命に姿を変えたのではなく、近世の終了とともに静かに消滅した」ということになるであろう。

阿曇比羅夫の命日とお船祭りの催行日が結びつく機会は150年間いつでも存在したことになるが、それが平成初期になったのはひとえに時代の変容と神社側の事情によるものである。

穂高神社 御祭神の変遷

天正七年(1579年) 「西大祝文書」

前欠(本殿など不明。境内社のみ)

若宮大明神(祭神名不明) 牛頭天王社 子安大明神 八意思兼命社 保食社
少彦根社 (俗にはものくさ太郎と云ふ)

元禄十一年(1698年) 「穂高組邑々寺社御改帳」

大明神(本殿) 天津彦火火瓊瓊杵命
左殿 天児屋根命 天太玉命
右殿 天王屋命 天鈿女命 石凝姥命

天照大神 若宮大明神(祭神名不明) 牛頭天王 子安明神 八意思兼命
八幡 保食神 少彦名命

天保十四年(1843年) 「善光寺道名所図会」

主祭神 穂高見命 天照大神社
南殿 石婆女命
北殿 瓊瓊杵命

八意思兼命 八幡社 保食神 少彦名神 (以上 四柱相殿なり)
若宮社(祭神名不明) 牛頭天王 子安社 天満宮

明治六～九年(1873年～1876年) 「県神社明細帳」

奥社 穂高見命 里宮 中社 穂高見命
左社 綿津見命
右社 瓊瓊杵命

神明社(天照皇太御神) 若宮社(安曇比羅夫) 八坂社(素戔鳴尊)
子安社(木花開耶比売命) 保食社(宇気母智命) 鹿島社(武甕槌神)
秋葉社(軻遇突智命) 事比羅社(大物主命) 菅原社(菅原道真) 疫神社(素戔鳴尊)
四神社(菅田別尊 八意思兼命 品陀和気命 蛭子神 猿田比古神 少名彦神)

現在(概ね戦後)

奥社 穂高見命 里宮 中社 穂高見命 別宮 天照大御命
左社 綿津見命
右社 瓊瓊杵尊

若宮社(安曇連比羅夫命) 若宮相殿(信濃中将) 八坂社(素戔鳴尊)
子安社(木花開耶比売命) 保食社(宇気母智命) 鹿島社(武甕槌神)
秋葉社(軻遇突智命) 事比羅社(大物主命) 八幡社(菅田別尊) 疫神社(素戔鳴尊)
四神社(菅田別尊 八意思兼命 蛭子神 猿田比古神 少名彦名神)
菅原社(菅原道真公) 歌神社(柿本人麻呂公) 八王子社(五男三女神)
諏訪社 巖島社 穂高霊社